

第四百二十回 青葉会 句会報

令和三年四月二十二日(木) WEB句会

選者 川口孤舟

投句・選句 伊賀山そらお 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小早健介 在間千恵  
佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫 長谷見びん 福島正明  
古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄  
赤田堅・安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 松崎浩  
村田くに子・山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

十四点 ひとつ目づつ漁網繕ふ日永かな

孤舟

(そ・五・健・恵・〇た・ゆ・隆・び・〇允・  
〇正・啓・規・天・三)

十三点 ◎菜の花や猫駅長の大あくび

昇

(眞・そ・忠・孤・千・恵・龍・堂・允・  
正・亜・天・け)

八点 海の面を星空として蛍鳥賊

孤舟

(堅・龍・雅・允・昇・啓・浩・け)

七点 春寒や水に流せぬ事がある

正明

(〇眞・紀・孝・恵・隆・允・〇三)  
(紀・孤・五・孝・雅・び・啓)

◎「春愁」と墨書し暫しまどろみぬ

亜也

(紀・孤・五・孝・雅・び・啓)

六点 石楠花や西に浄土の當麻の地

五郎太

(堅・紀・健・孝・敏・三)

春の雲駱駝のとけて白鯨

びん

(〇五・千・龍・堂・啓・三)

春雨や二艘出てゆく五目釣

全

(紀・隆・啓・亜・け・三)

朝寝して義理欠く用の無かりけり

昇

(紀・恵・ゆ・正・隆・天)

海老蔵の見得も大きく夏近し

けい子

(紀・恵・敏・雅・正・天)

五点 鳥獣戯画展を観て

兎(う)猿蛙遊びほうけて春日かな

千恵

(〇堅・紀・忠・敏・け)

独酌や遺影の妻と惜しむ春

恵洲

(紀・堂・允・規・盛)

目借り時膝にピッタリ文庫本

堂哉

(千・ゆ・隆・浩・天)

◎初蝶が横断歩道渡る朝

正明

(眞・そ・孤・た・雅)

青不動吉野静まり春惜しむ

けい子

(そ・紀・五・た・亜)

四点

九代目・春風亭柳枝襲名

春に適ふ佳き名襲ひて歯切れよく

恵洲

(堅・紀・允・亜)

青春の野暮ったい甘さ春キャベツ

忠彦

(〇紀・孝・正・〇け)

下枝折り箸置きにせむ花見かな

啓子

(紀・健・隆・盛)

◎うかと引くことも危ふし春の風邪  
 病院の窓から眺む散る桜  
 先送りされし挙式や春惜しむ  
 灰汁抜きの妻の手際よ筍飯

亜也 (孤・ゆ・び・〇盛)  
 天牛 (紀・そ・び・規)  
 盛雄 (〇そ・紀・忠・五)  
 全 (眞・紀・忠・昇)

三点

ひと隅にかたくり群れるゴルフ場  
 医師の許可得て呑む酒や春の宵  
 峠とは別れるところ春の虹  
 竹樋より水を手に受く花の山

紀久男 (眞・健・正)  
 忠彦 (紀・敏・け)  
 孤舟 (紀・た・天)  
 五郎太 (昇・〇啓・三)  
 健介 (紀・孤・盛)

◎ビバルデイの「四季」の調べや春惜しむ  
 ◎夜半(よわ)の雨月隠れたる西行忌  
 ◎躑躅全開鬱陶しとさへ思ふまで

ただしげ 恵洲 (紀・孤・び)  
 規雄 (紀・〇孝・堂)  
 ゆたか (千・雅・昇)  
 雅夫 (眞・紀・く)  
 昇 (〇孤・五・啓)  
 啓子 (紀・た・昇)  
 亜也 (紀・た・〇浩)  
 けい子 (紀・規・亜)  
 天牛 (紀・忠・く)

◎ニュートンに逆らふやうに石鹼玉  
 蓮華咲く野辺に父の背肩車  
 ひたすらにそぞろ歩きし花見かな  
 げんげ野に又家建ちて子等の声  
 葉桜や病む人のふえ身の廻り

二点

芝居はね回転寿司の大賑ひ  
 ◎発句してはて何だつけ春の朝

紀久男 (敏・く)  
 忠彦 (紀・孤)  
 全 (紀・〇昇)  
 孤舟 (紀・〇恵)  
 健介 (〇龍・盛)  
 ただしげ (浩・規)  
 堂哉 (〇健・浩)  
 全 (龍・雅)  
 ゆたか (紀・規)  
 雅夫 (紀・孝)  
 全 (紀・忠)  
 全 (堅・紀)  
 全 (千・龍)  
 正明 (千・龍)  
 啓子 (紀・ゆ)  
 全 (孤・堂)  
 けい子 (紀・ゆ)  
 盛雄 (紀・孤)

◎静謐なる天空汚し黄砂降る

一点

新緑や愛犬列なす散歩道  
 林家染一の「中村仲蔵」  
 冷酒(ひや)で飲(や)る芝居嘶にたつぷりと

そらお 紀久男 (堅)

菊之助初役の「馬盤」の光秀

冴返る義父の芸継ぎ大当り

猫切られ騒ぐ町内辛夷咲く

\*猫は元氣になり町内を散歩しています。

恋猫の夜遊び覚え戻り来る

神奈備のお山を歩く春の旅

難波より来る街道花菜風

揚雲雀京の跡の空広し

友訪ぬひとひやすらぐ春の宵

夜来の雨花散らせてや宴の跡

すみれ咲く花壇で遊ぶスズメかな

霾(つちふる)や句作苦行と思へる日

春宵やアリア熱唱胸燃ゆる

散り初めの桜揺蕩ふ高瀬川

逝きし妻ふつくら笑顔スイトピー

放たれて土手ゆく犬や鳥雲に

花の寺縁起は武家のことばかり

奥山はもう無理の身かすみれ草

ジョッガーの脚の長さや芝桜

田麩のごと野を埋め尽くす桜草

のどけしや三味奏でゆく水牛車

春の海揚がるコウイカ墨吐いて

蛤の汁の濁りもまたよろし

佃煮の浅蛸をくれし酒友かな

孫成長三年生に進級す

花冷えやジャズ好きの義弟重病に

春暑しテレワークの子に用たのむ

菜の花や百万本の淡路島

全 (敏)

忠彦 (紀)

孤舟 (〇堂)

五郎太 (紀)

全 (紀)

全 (紀)

千恵 (紀)

ただしげ (紀)

全 (紀)

恵洲 (健)

ゆたか (紀)

堂哉 (紀)

規雄 (紀)

びん (垂)

全 (紀)

全 (紀)

全 (紀)

正明 (紀)

昇 (千)

全 (紀)

啓子 (紀)

亜也 (紀)

全 (紀)

天牛 (紀)

全 (紀)

全 (紀)

【句評】

十四点句 ひと目づつ漁網繕ふ日永かな

孤舟

ただしげさん・・・春の浜辺のゆったりした雰囲気が感じられて良い

恵洲さん・・・気の遠くなるようなゆっくりとした作業が春の長閑さに合っている

十三点句 菜の花や猫駅長の大あくび

昇

孤舟さん・・・長閑なローカル駅の人気ものも眠くなってきた。

恵洲さん・・・菜の花の中の田舎の小駅の長閑さが猫の大あくびで一層感じられる。

堂哉さん・・・季語が良いですね。田舎の駅と大あくびが目にかかびます。

八点句 海の面を星空として螢鳥賊

孤舟

雅夫さん・・・私の故郷富山を懐かしく思い出しおります。

浩さん・・・昔見た富山湾の夜の暗い海での幻想的なイカ漁を思い出します。

七点句

春寒や水に流せぬ事がある

正明

眞希子さん・最近水に流せぬ、いえ、流してはいけない問題に直面し、いささか苦しめられました。その経験から迷わずいただきました。

紀久男・福島原発の放射能汚染水を海に流すこと担当大臣が知事に通告。漁業関係者が懸念する「風評被害」には「補償する方針」のようです。会津の酒やいわきの魚を好む小生としては全く意に介せず積極的に買い求めております。句評としては上五の季語が効いていると思います。

惠洲さん・同感。水に流せないこともありますよね。春寒が効いています。

隆さん・人の旅立ちも清らかな心でとはいかないもの。

◎「春愁」と墨書し暫しまどろみぬ

亜也

孤舟さん・春だからこそ感じられるそこはかとない愁い

紀久男・なかなか面白そうな句です。

六点句

石楠花や西に浄土の當麻の地

五郎太

紀久男・西宮の独身寮一番の呑兵衛の相伴で當麻寺へ行ったことありました。当時、俳句は全くの門外漢で、酒に釣られて行ったようなものですから花の記憶等はありません。いい句ですね。

春の雲駱駝のとけて白鯨

びん

五郎太さん・ラクダがクジラになるところ、漢字をつかい、溶けるを平かなにしているところが実に巧みです。

千恵さん・雲の形を観ているとやはり何かを連想しますね。“とけて”が良いですね。堂哉さん・メルヘンですね！

春雨や二艘出てゆく五目釣

びん

啓子さん・春雨の中二艘の釣り船が出ていく。小さな入江からでしょうか、水墨画を見るようでもあり雑魚釣りでも釣り人の愉しい春日を感じられるようでもあります。紀久男・夜明けの駿河湾の“二艘ペア”が白子や小エビを網ですくいます。

朝寝して義理欠く用の無かりけり

昇

惠洲さん・これも同感。お互いに老いましたね、ご同役。

隆さん・「元日の酔託に来る二月かな」(江戸時代中期の俳人高井几董)を思い出した。

海老蔵の見得も大きく夏近し

けい子

惠洲さん・成田屋の大きな目を見開いた颯爽たる見栄が夏近い季節感にぴったり。

敏郎さん・愈々襲名真近ですか。

雅夫さん・ひっこみ勝ちの日常。大きな見得は気持ちがいいですね。すつとします。

正明さん・海老蔵の見得から夏を予期する、そういう発想が楽しい。

五点句

鳥獣戯画展を観て

兎(う)猿蛙遊びほうけて春日かな

千恵

堅さん・「遊びほうけて」がスケール大きく良いと思います。

忠彦さん・三三の鳥獣戯画の特別番組を見ました。大変面白かったです！

紀久男・中七の措辞が気に入りました。昭和の四十年代何度か訪れました。観光客少なくて座敷で寝転んで休憩したことがあります。

独酌や遺影の妻と惜しむ春

惠洲

紀久男・・・しみじみとする好句。

目借り時膝にピッタリ文庫本

堂哉

千恵さん・・・あるある”な現象ですね。私も経験あります。

隆さん・・・季語が活きる。「目借時膝に落とした文庫本」がいい。

浩さん・・・半世紀以上前高校の授業で知った「蛙の目借時」を懐かしく思い出し、同時に

うたた寝で本を落とす今の自分、来し方の幾星霜。

◎初蝶が横断歩道渡る朝

正明

孤舟さん・・・横断歩道は人間が渡るところだが・・・初蝶がひらりと渡ってゆく。

青不動吉野静まり春惜しむ

けい子

五郎太さん・・・今年桜の開花が早く、大変な人出だった蔵王堂のあたりもはや葉桜でしょうか。

ただしげさん・・・いつもの様な喧嘩もなく過ぎた高野山・吉野に春の名残を惜しむ様子が感

じられる。

紀久男・・・大阪の独身時代、同期の前田圭秀と花見したことあります。茶店で彼が

ご馳走してくれました。

四点句

九代目・春風亭柳枝襲名

春に適ふ佳き名襲ひて歯切れよく

惠洲

亜也さん・・・挨拶句として上手くまとめて出色。

紀久男・・・中々上手いベテランの作。高座を聴きたくなります。

青春の野暮ったい甘さ春キャベツ

忠彦

けい子さん・・・本当に野暮ったい甘さですね、春キャベツ。甘さと新鮮さと若さ。

紀久男・・・「青春の野暮ったい甘さ」に、旬の「春キャベツ」の甘さを引つ掛けて上手い  
ものです。

下枝折り箸置きにせむ花見かな

啓子

隆さん・・・情趣あり。「花の枝折りて箸置く昼餉かな」で如何。

紀久男・・・老舗の料亭の弁当に同様の箸置き付いてました。粋だなと、一入美味しく感じ  
れました。

◎うかと引くことも危ふし春の風邪

亜也

孤舟さん・・・コロナ禍が猛威を振るっているので心配。

先送りされし挙式や春惜しむ

盛雄

五郎太さん・・・親も気を揉みます。ワクチン接種の普及が待たれます。

灰汁抜きの妻の手際よ筍飯

盛雄

紀久男・・・筍は関西で豊作。関東は多雨で不作。うらやましいです。

三点句

医師の許可得て呑む酒や春の宵

忠彦

敏郎さん・・・さぞかし美酒でしょうね。

竹樋より水を手を受く花の山

五郎太

啓子さん・・・竹樋を伝って流れ落ちる清冽な水。美しい景。放哉の”いれものがない両手で  
受ける”を思い出しました。

◎ビバルディの「四季」の調べや春惜しむ 健介

孤舟さん・・・いつの世でも、季節は確実に移り変わってゆく。

◎夜半（よわ）の雨月隠れたる西行忌 ただしげ

孤舟さん・・・残念ながら西行に因んだ望月には恵まれなかった。

浩さん・・・何となく幽玄な風景に波乱万丈の西行の生き様が感じられます。

◎躑躅全開鬱陶しとさへ思ふまで

恵洲

孤舟さん・・・躑躅のあまりに見事な咲き振りに圧倒される。

びんさん・・・確かに、品種改良の成果か、盛りには花が付きすぎの圧迫感があり共感です。

ただ「躑躅」も「鬱陶」も過密な字体が揃いました。中八の字余りもちよつと窮屈かも。これでは如何でしょう。「つつじ咲く鬱陶しとも思うまで」

遠き日や妻の肩抱き花の下

規雄

孝岳さん・・・時限を越えて感じる事が出来るいという人への思いを表している秀句だと思います。

紀久男・・・妻恋いの好句。

◎ニュートンに逆らふやうに石鹼玉

昇

孤舟さん・・・ニュートンの法則に従わず、風の意のままに漂い続けるシャボン玉

蓮華咲く野辺に父の背肩車

啓子

ただしげさん・・・野辺での親子のほほえましい様子が見て取れる。

紀久男・・・幼い頃の亡き父の想い出を詠んだ好句。

げんげ野に又家建ちて子等の声

けい子

亜也さん・・・少子化の中、これも慶賀すべきこと。

紀久男・・・多摩丘陵の林野を潰してニュータウン出来ており、緑は大幅減です。名古屋はまだ宅地開発されているようですが、緑は大丈夫なんでしょうか。

ひたすらにそぞろ歩きし花見かな

亜也

浩さん・・・例年桜見物に毎年訪れる場所を選択して出かけたのにこの二年は近所の散歩で我慢。「ひたすらそぞろ歩き」の気持ちがよくわかる。

葉桜や病む人のふえ身の廻り

天牛

忠彦さん・・・歳をとると同病相憐れむころが多くなりますね。実感。

紀久男・・・一病息災であれば長寿時代を愉しめそうです。家族に迷惑掛けない程度の病気や呆けでありたいものです。季語の幹旋がいいと思います。

二点句 ◎発句してはて何だっけ春の朝

忠彦

孤舟さん・・・折角夢の中で名句が生まれたが、目覚めたらすっかり忘れていた。

紀久男・・・思わず笑って仕舞う憶えのある作品。

桜散る聖火リレーの馬鹿騒ぎ

忠彦

昇さん・・・桜が散りオリンピックまで残り僅か。コロナの収束が一向に見えない中、聖火リレーと浮かれている場合ではないと叫びたくなります。風刺の効いた一句ですね。

菖蒲湯へ稚のふぐりと沈みけり

孤舟

恵洲さん・・・多分、孫との入浴。孫への愛情と成長を願う気持ちだが、そう言わずともわかる。散る桜世界泣かせしおしんかな 健介

龍平さん・・・おしんの様な子は 今なお世界にあまた居て 難儀な生活を強いられているはず。解決困難な人類の大課題。よくぞ 詠んで下さいました。

雨上がり白鮮やかなハナミズキ 　　ただしげ

浩さん・・・以前住んでいた米国ヴァージニアの家の周りに咲いていた州の花「dog wood」、  
楚々として素敵です。

鳶高く雲雀の輪唱東山 　　堂哉

健介さん・・・雲雀たちのさえずりを輪唱と表現されたのはお上手。空高い鳶を背景にされたのもいい  
ですね。

浩さん・・・声はすれども姿はなかなか見えない鳥たちに春の息吹を感じます  
水浴びのひよのしぶきや春盛ん 　　雅夫

紀久男・・・季重なりですが、近辺に見かける光景です。下五を別の表現にされたら如何で  
しょう。

懐しき友の思い出藤咲きぬ 　　雅夫

忠彦さん・・・藤の花からの記憶、綺麗な句です。

初蝶や花片に紛ふ翅光る 　　啓子

紀久男・・・「萬緑」の武蔵野吟行の折よく見かけ、私も似たような句を作ったことがあり  
ました。

◎北国の土の香連れ来アスパラガス 　　啓子

孤舟さん・・・泥付きアスパラガスは北海道の香りがする。

鳥達がむつみ乱れる花筏 　　けい子

紀久男・・・井の頭公園等の大きな池、あるいは小川でも良く見られる光景を句にされています。

◎静謐なる天空汚し黄砂降る 　　盛雄

孤舟さん・・・視界を遮る程の大量の黄砂襲来。

紀久男・・・人権侵害（民族迫害？）でもめるウイグルのタクラマカン砂漠から飛来する

黄砂。北京が汚れる分には構いませんが関西中心に我国まで汚すのは迷惑です。  
せめて威圧的な政治姿勢を改めて欲しいもの。上五の表現がいいですね。

一点 猫切られ騒ぐ町内辛夷咲く 　　忠彦

\*猫は元気になり町内を散歩しています。

紀久男・・・近頃犬よりも猫が人気です。目下日経紙に夏目漱石モデルの小説連載され、漱石の  
猫好きが面白く描写されております。切られて騒ぐ人間に対し辛夷が超然としている  
様を上手く句にされています。

恋猫の夜遊び覚え戻り来る 　　孤舟

堂哉さん・・・ユーモアたっぷり。今晩は恋が成就したのかな、それとも!!

神奈備のお山を歩く春の旅 　　五郎太

紀久男・・・歌枕の地、奈良のなだらかな低山をのんびり歩く春旅の気分が伝わる好句です。

夜来雨花散らせてや宴の跡 　　ただしげ

紀久男・・・上五、中七は良くある句ですが、下五がいいですね。恐らく片付けが綺麗になされ  
ていないんですね。マナーが問われます。

春宵やアリア熱唱胸燃ゆる 　　ゆたか

紀久男・・・滝廉太郎の「荒城の月」あるいはモーツアルトの「フィガロの結婚」ヴェルディの  
「椿姫」。お若いんですね！

逝きし妻ふつから笑顔スイトピー

規雄

紀久男・・・愛妻家の作者の好句ですが、三段切れですので、上五を「亡き妻の」にしたら如何でしょうか。

放たれて土手ゆく犬や鳥雲に

びん

亜也さん・・・動画になっているところがいいと思いました。

花の寺縁起は武家のことばかり

びん

紀久男・・・鎌倉の禅寺でしょうか。中七下五の表現がユニークと思います。

ジョッガーの脚の長さや芝桜

正明

紀久男・・・ジョギングの若者の脚の長さや芝桜の丈の短さとの対比が見事です。

のどけしや三味奏でゆく水牛車

昇

紀久男・・・沖繩か奄美大島、或いは台湾でしょうか。行ってみたいくなる作品です。

春の海揚がるコウイカ墨吐いて

啓子

紀久男・・・海老蔵襲名で各地回り博多座出演の折、地元友人に中洲でご馳走になった折、活イカの刺身や天麩羅に舌鼓。酔っ払って靴を履いたままベッドに寝たことを思い出しました。

蛤の汁の濁りもまたよろし

亜也

紀久男・・・宿酌（ふつかよい）に蛤の汁は旨くよく効きます。お澄ましも濁りもいいですね。

佃煮の浅蛸をくれし酒友かな

亜也

紀久男・・・酒の肴として魚介の佃煮は最高です。好い「酒友」をお持ちで合わせですね。私も似たような句を作っております。

孫成長三年生に進級す

天牛

紀久男・・・我が孫も同様です。いい作品です。

## 次回青葉会

五月二十七日（木）井の頭公園吟行（雨天決行）午前十時 吉祥寺駅前「花子象」前集合

午後一時半～五時 句会・御殿山コミュニティセンター

（武蔵野市御殿山1-5-11 ☎0422-48-9309）

※吟行参加者は所定の時間場所に集合が望ましいですが、事情によっては直接コミュニティセンターへお越しいただいても結構です。

ランチは三々五々召し上がってご参集ください。

当季雑詠5句 投句は3句までで、五月二十六日（水）午前十時までと致します。

令和三年四月 青葉会報

一、感染者増加傾向のためEBC句会に逆戻り、びんさんはじめ21名94句投句あり、ご覧のように孤舟さんを筆頭に昇さん、正明さん、亜也さんが好成績でした。

竹橋ビルの改築成り、五月引越しです。句会場として利用できるのかどうか打診する予定です。旧ビル時代は、テナントの帝国ホテルが運営していた来客食堂の個室を借りておりました。



二、関係者近詠

寒の水跳ね上げ介護の手を洗ふ	眞希子	絵馬に誤字寒の戻りしゆゑならぬ	陽亮
硬煎餅砕く齒力成人日	全	梅が香や神鶏昂り羽を搏ちぬ	全
婚約者を妻と紹介山笑ふ	全	立方と地方同舟梅見茶屋	全
「休ませて」と病室へナースヒヤシンス	全	手の甲の皺は自分史海苔あぶる	全
鯛焼きの餡まだ熱き隅田川	弘子	寒は戻る病は進む噫ただ噫	全
薄氷期否と言ひきる古稀となる	全	河東節仲間のなかにし礼追悼	全
梅白し刻字新たな鎮魂碑	全	地獄を見た詩人を悼む切山椒	紀久男
真つ白な上履き試す入学児	全	歌舞伎十八番「毛拔」	全
遠州の銘茶とろうり春うらら	全	疫祓ふでつかい見得や初芝居	全
		吟行や光秀鬘肩の牡丹鍋	全
		リウマチの薬効きをる二月かな	全

「森の座」 5月号

遅咲きの花に招かれ馬籠宿	盛雄	冷酒（ひや）で祝ふマスターズ制覇の夕餉かな	紀久男
飛花落花なにごとくも無き夕べかな	全	万葉の夕陽が丘に春惜しむ	全
世の弛み愁ふばかりや花は葉に	全	みちのくの秘湯の宿開く四月かな	全
ワイン酌み春宵一刻惜しむかな	健介	神護寺の茶店で一献春惜しむ	全
須磨の海油風なり春惜しむ	全	到来の鮎（いかなご）釘煮おしいただく	全
列車事故の古傷痛む春夕べ	全		

（福知山線脱線転覆事故）

「きさらぎ句会」 四月

歓声をあげ満点星の芽吹きかな	允章		
萍草生ひそむ池に模様を描きつつ	全		
諸葛菜いっばい咲かせ女流画家	全		

三 孤舟選者の第四句集「星空」が各誌に掲載されております。

(A) 「俳句」(角川書店) 5月号

銀輪の列若草の風となる

(評) サイクリングの若者達の楽しく明るく明るい景が、中七下五の措辞に活写された。五感転換法の視覚から触覚への転換によって躍動感が出た。(山田貴世)

(B) 「俳句年鑑」 2021年版 (本阿弥書店) ^全国実力作家326人の秀句V

どの子にも凧の空あり未来あり (評) 「あり・あり」のリフレインが快いリズムを生む。自画像は死ぬまで未完寒オリオン 21世紀の行く末を見届けることが出来る子たちの輝く未来に羨望感が湧く。この星に生くるひとりや冬銀河

少しづつ筆を加えてゆく自画像。寒オリオンの果てしなさを思うと未完のまま終わることが予想されている。

冬銀河によってかえって自分の生が意識されるのである。(森野稔)

(C) 「俳句年鑑」Λ2020年の句集からV

幾たびも花の名を問ひ大花野

(評) 作品の抒情が豊かに揺蕩うている。俳諧は「笑ひ」を

みどりごへ雛の命が継がれけり

内包して詠み継がれてきた文芸だが、近代俳句の大仰

かなかなの森を大きくしてをりぬ

な可笑しみや言葉遊びに距離を置く。川口氏の佳き詩

韻を味わいたい。

(D) 「俳句四季」(東京四季出版)5月号

座談会Λ最近の名句集を探るV第73回。齋藤慎爾・辻美奈子・山本潔・筑紫磐井(司会)が

孤舟さんの40余句をとりあげております。

#### 四 雅夫さんと子規の縁者との交流について

社友会幹事をされE田を創められた今泉政春さんから小生に送られてきた「伝記 正岡子規」を読んで同期の雅夫君に送付。すぐに彼から達筆の礼状が届き、驚いたことに子規の義理の孫である正岡明氏(樹木医。子規関係の執筆、マスコミ講演会の講師等)と旧知の中で子規関連の資料を沢山頂いており、酒呑み仲間の由。彼は入社以来紙パルプ部門一筋で四国の製紙会社に出向していた頃から交際が始まったそうです。

彼は故・塩見勝さん(丸紅パーソネル・サポート幹部)と同じ枚方在住で万葉集の解釈や、継体天皇の出自で互いに譲らぬ論客でしたが、何故か俳句の道に入ってきました。正岡明氏との交際で勧誘されたのかもありません。京都の龍谷大学の社会人コースで手ほどきを受けています。小生、大阪の同期会(市橋幹事)に毎年出席。二次会のミニミで彼とご一緒しております。

令和三年五月十一日

紀久男

記